

2004年6月28日 日本テレビ 定例記者会見

要旨

1. 最近の視聴率の動向と、7月改編の狙いについて

記者：昨日「ハリーポッターと賢者の石」が30.8%という高視聴率が出ましたが、最近の視聴率動向と、7月改編の狙いについて併せて聞かせてください。

間部耕幸社長：4月の改編ですが、視聴率的には全枠でまずまず健闘していますし、トータルでもアップをしていますので、順調に推移してきていますが、7月の改編につきましては、今まで以上に頑張るようにと編成にも言っています。また、7月以後10月改編に対しても成果を収めるようにということで、編成部長には伝えていきますので、詳しいことは山根編成部長からお話しします。

山根編成部長：先週放送しました「ハリーポッターと賢者の石」が30.8%をとってくれまして、もちろん今年度の日本テレビの最高視聴率です。また、日曜日のゴールデンの枠では21時の「行列のできる法律相談所」。これは紳助さんがMCでやっている番組であります。6月に入りまして4週連続で20%超えの視聴率を出しています。20%超えの番組は週に1本か2本ぐらいしか、各全局合わせましても出ない、非常に20%超えの番組が出るのは難しいのが現状です。先週放送しました水曜日のドラマ「光とともに...～自閉症児を抱えて～」自閉症の話でしたが、最終回を拡大しまして18.3%、11話の平均が、15.5%ということで、何とか水曜日は数字をとってくれました。全般的には4月の改編、月曜日は21時、22時、木曜日の19時、20時、ドラマ2枠等、いろいろなことで改編しましたが、視聴率のほうでは底上げが図られたと思っています。

一方、ナイターはちょっと厳しい状況が続いています。得点差があまりないような試合内容のときは、好ゲームですと15%超えが出ていますが、一方的な試合、ちょっとそういう試合がこのところ多いものですから、そういうときには1ケタも出るということで、今後最強打線に頑張ってもらって、日本テレビとしては、最大限の応援をしていきたいと考えています。

あとは7月の新番組ですが、これにつきましては、プライムタイムで3枠を

考えています。ドラマの枠2枠、水曜日のドラマ「ラストプレゼント」、出演者は天海祐希さんと永作博美さんを予定してまして、娘と生きる最後の夏、余命3か月の宣告を受けて、失われた時間を埋めるために別れた娘と過ごす最後の夏の日々を描いたドラマです。

もう一本、土曜日は、「愛情一本」、松浦亜弥さんが扮します高校3年生の娘さんの役で、父親が町道場をやっている。この父親の役が中村雅俊さんを予定してまして、子どもの柔道の教室を父親の跡を継いで、松浦亜弥さんが子どもの柔道教室の師範代になるというような話でして、これにつきましては、柔ちゃんこと谷亮子さんの柔道の演技指導などを現在受けています。実際にドラマの中でも谷さんが出演してくれています。夏のアテネオリンピックの金メダルを谷さんがとってくれば、水曜日のドラマ、そして土曜日のドラマにつきましても、柔ちゃんの件もありまして、そういう相乗効果があって、水曜日、土曜日の2枠、7月のドラマで期待しているのが現状です。

もう一本は日曜日の22時30分、現在やっている「ワカチュキ」の枠です。30分の中居正広君がMCをやっている番組ですが、これは企画変更をします。だれもが知っているような、あまり真剣に考えたことがないようなテーマをスタジオで中居君がゲストとVTRで問いかけるような、ちょっと新しい形式のバラエティのものを30分考えております。

この3枠が主なこの7月の新番組としてスタートいたします。先ほどお話ししましたとおり、4月に改編しました枠はそこそこの数字で現在走っていますので、これをずっと7月の改編後も引きずりまして、早めに10月改編に結びつけていきたいと考えています。視聴率動向、7月新番組はそのようなことで考えています。何かございましたら、また新番組等はPR局までご連絡いただければ編成の担当をいつでも差し向けたいと思います。

記者：恒例の24時間テレビについてお聞かせください。

山根編成本部長：24時間テレビは、先週お話ししましたとおり、枠は、8月21(土)、22(日)です。スタートの土曜日には、アテネオリンピックの野球中継が入っています。この試合内容がどのような形になるのか、もしかしたら延長等があるかもしれません。それによっては24時間テレビの頭の部分が野球の台湾戦ということで、ある程度の視聴者ニーズがあると思いますので、いい形で24時間テレビに入れと思っています。ちょうどアテネオリンピックの真ん中のところでの、24時間テレビになりますので、どういう結果になりますか。また、普段と同じような大きな括りではマラソン等も考えていますし、2時間ドラマ等を含めた形での24時間テレビを考えています。枠切りについてなどの細かい

ところは、現在、現場の高橋CPを中心にやっています、現在PR等含めた作業で盛り上げ等を考えています。

2．景気動向と第1四半期の業績見通しについて

記者：第1四半期の業績見通しについて説明してください。

間部社長：日本経済は設備投資や個人消費が堅調になってきており、企業収益に改善が見られます。景気が緩やかに拡大する中、テレビ広告の出向は前年を上回る状況になっています。一方で広告主は、企業効率の追求、ソフト、メディアパワーの選別、それに伴う効率的な広告費の投下を今後一層厳しく行っていくと見えています。

日本テレビの営業状況は現在の景気の追い風を完全に活かすきれてはいないというところが大変残念ですが、タイム、スポットとも前年をクリアする数字は達成しています。レギュラー番組セールスは堅調で、単発番組でもサッカーのトライネーションズカップや金曜ロードショーの「ハリーポッターと賢者の石」が、売上げに大きく貢献し、タイムセールスは前年比100%をクリアする見通しです。スポットは4月大変苦戦しましたが、それ以降はかなり健闘しています。飲料、家電、薬品、化粧品、トイレタリー、それから自動車、精密機械、住宅など広い分野で出向が伸びており、第1四半期はやはり100%をクリアできると見えています。

3．視聴率操作問題などの再発防止具体策について

記者：視聴率操作の問題について、法令遵守のためにコンプライアンス憲章をつくられたということですが、その狙いなどについて、聞かせてください。

氏家齊一郎会長：コンプライアンス憲章には、非常に常識的なことが書いてあります。かねがね申し上げていますが、日本テレビの社員の99%以上はこういうものを身に付けていると思っています。ただ、コンマ何パーセントの人が身に付いていないという可能性がある。しかし、マスコミという業界は100%を期待されています。そこでコンプライアンス意識を持っている大半の人たちが、改めて、そのコンプライアンス意識を自分の中、および自分の働いている周囲に浸透させることによって、極少数の人たちの絶対に起こしてはならない不正な動きを抑止しようというのが、基本的な考え方になっています。

この基本憲章に盛り込まれたことは、極めて一般的、常識的なことですが、往々にして忘れられ、意識の外に消えてしまうので、それを絶えず思い出していくということが、このコンプライアンス憲章の狙いです。結局、個人の自覚の中に徹底させることがすべての基礎になります。例えばアメリカでエンロン社の事件が起きましたが、あれはエンロン社だけではなくて、厳重な規制法律で縛られている会計士がエンロン社と同調して不正をやってしまったため、事件がより大きくなりました。アメリカではそのとき議論が沸騰しましたが、その議論の過程を調べてみると、やはり私どもが考えたことと同じような議論をしており、やはりこれは1つの共通な考え方であると思います。

記者：それは社員に配られたのですか。

氏家会長：そうです。

記者：具体的にはどのようにして現場で実践の徹底を図っていくのですか。

氏家会長：アメリカでもエンロン社の事件後につくられた法律では、結局個人が自覚を持つことが一番重要だということで、宣誓をします。宣誓をやることによって、新しく思い返して、意識に残していくということをやっているようですから、日本テレビでも憲章に対して、「この憲章を遵守します」と各人がサインし、会社に提出しています。私も書きました。これを1年に1回ずつやるかどうかは、今後考えたいと思います。

記者：視聴率問題について、先日考える会の答申が出て、局の取り組みが発表されたのですが、これについて改めて今後どういうふうに取り組まれていくのでしょうか。

萩原敏雄副社長：考える会の答申については、あの実施案をもとに、今、現場と詰めております。特に満足度調査に関しましては、さらに細部にわたって詰めて、いかに現場に徹底させて使っていくかという点で、今10月実施に向けて検討しています。

次に視聴者企画会議については、これもまた同じく募集の方法などについて、実際にそれを担当する現場のプロデューサーサイドと詰めている最中です。

それから報奨制度を強化しようという点では、8月の開局記念日に毎年番組

表彰をしていますが、今年はその1つとして、番組審議会の推薦報奨番組として、社長報奨を授与することを検討中です。報奨規定を改定しましたので、その番組審議会推薦の最初の作品ということになると思います。なお、考える会の答申と実施案については、番組審議会でも前回すべてご説明をいたしました。その後の経過については以上です。

記者：再放送を増やしたり、例えば芸術祭に出すような作品作りに積極的に取り組んだり、といったことを発表されましたが、具体的な予定はありますか。

萩原副社長：再放送については、連続ドラマですので、総集編というわけにもいきませんし、編集するということも難しい。「さきどり！Navi」や「汐留スタイル！」という生番組をつくりましたので、私どもの再放送の枠がない。再放送をするなら、やはりできるだけ多くの人に観ていただけるような枠で、と考えてみると、再放送より、むしろ「すいか」のスペシャルドラマのような新作を企画したほうがいいのかとも考えており、今、編成本部で、再放送にするのか、スペシャルにするのか詰めています。

また、DVDがすでに発売されておりますので、そのPRの強化や、視聴者プレゼントのようなことも考えております。芸術祭の参加作品についてはまだ準備の期間が足りない状況です。

山根編成局長：今後は単発系の2時間もののニーズがあるので、新しくできたドラマ制作部で期末期首に向け、積極的に取り組んでいきたいと思っています。

記者：先月の“考える会”の会見の際、営業サイドで新しい基準について、スポンサーサイドの理解を求めていくかということを検討中とのことでしたが？

萩原副社長：「テレビ番組視聴満足度調査」は、10月から実施する予定です。実際10月編成を調査にかけて、その結果が出てくるのが多分年内になると思います。約1か月が経過したところで調査をかけますので、その結果が出てくるのは、やはりどうしても11月末になろうかと思います。その時点で出た結果でスポンサーの皆さんにどのように説得していくか、もちろんその前から考える必要がありますが、やはり結果が出てご説明することが先だと思うので。それを受けて、スポンサーの皆さんに、セールスポイントとして考えていただけるよう努力したいと思います。

4．プロ野球界の動向について

記者：プロ野球が、近鉄・オリックスの合併、１リーグ制など、最近動きが活発になっています。どのように見えていますか。

氏家会長：私はジャイアンツの相談役をやっているのですが、具体的な話もある程度は知っていますが、今あまりオープンにしていけないだろうということもあると思うのですよ。ただ、流れはどういう組み合わせで行われるか、わかりませんが、やはり合併がある程度促進されるかなという感じは受けております。日本のプロ野球はまごまごするとアメリカの３Ａみたいになってしまうという見方もあります。つまり、いい選手は、どんどん出ていってしまい、それで試合の濃さが少なくなると同時に、スターがだんだん減っていったいく可能性があるだろうと。その少ないスターを12球団で分けてやっているよりも、10球団なり8球団なりで分散させたほうが、試合の密度も高くなるし、スターが出る可能性も高いし、ファンの方にも喜んでいただけるだろうと。それで私どもの仕事、テレビとしてのプロ野球放送上にプラスが出てくるだろうというふうに思っています。大スターとまではいかないが、中スターがたくさん活躍するような状況を作っていけば、だんだん、若年層も興味を持ってくれるかなという気はしていますね。

記者：仮に１リーグ制になった場合、いろいろ放送局としてもその編成上の問題など、変化を強いられることになるかと思うのですが、お考えをお聞かせください。

氏家会長：これは、どの段階でどういうふうにプロ野球のオーナー会議で決まるのかわかりませんが、アメリカのようにコミッショナーのところすべての放映権を持つのか、あるいは今までどおり球団が持つことになるのか、その辺がどう決まるかによって、日本テレビの対応策も決まるだろうと思っています。だからその辺は非常に注目したいところです。

記者：氏家会長の私見としては、放映権、放送権はアメリカ方式がいいのか、あるいは分配方式がよいのか、どのようにお考えですか。

氏家会長：それは将来の期待値ですけど、僕はジャイアンツの視聴率が落ちたという話について、さっきも申し上げたように、今横ばいからちょっと強含みという感じだから、今後もそれで続くだろうと思っています。そう仮定すれ

ば、今までどおり、ジャイアンツの東京ドームでの放映権は、主として私どものほうで扱うことができることが一番望ましいなど。日本テレビの立場としては、そう感じています。これは私の立場としては、代表取締役会長だから、やっぱり自分の社のことを中心に考えないわけにいかないの、評論家的には言えないのですが、まあこれはコミッショナーおよびオーナー会議が、仮にそういう事態が生じたときに、どう考えるかを踏まえて対応するより仕方がないと思っていますね。

5 . 地上デジタル開始から 6 か月 HD化編成戦略などについて

記者：地上デジタルがスタートして半年。これまでの進捗状況とアテネオリンピックに向けての編成戦略等について説明してください。

間部社長：現在当社のナイター組のHD放送率は63%余で、全キー局では一番多くトップです。関東地区では、今年の秋には640万世帯、来年には1,400万世帯にまで増えるという予想でもあり、ナイター終了後のHDをどのように編成していくか検討しています。具体的には山根編成本部長から説明致します。

山根編成本部長：基本的な方針としては、日本テレビの系列も、他の系列に遅れることなくHDの制作体制を完全に確立し、デジタル放送の時代もリードしていきたいと考えております。

HD化を取り巻く環境ですが、現在、受像器は、全国で大体90万台が出荷されており、月10万台ペースで増えています。今年末には関東圏が中規模の出力で約640万世帯がカバーされることになっており、来年末には関東圏で最大の1,400万世帯がカバーされるようなスケジュールになっています。

日本テレビでは、午前から午後帯の生放送をHDで放送しており、巨人戦中継と合わせ、現在のHD比率は63%ぐらいのシェアになっています。ただ、野球が終わる10月以降、少しHD比率が落ちるので、今後はドラマをはじめとするゴールデン、プライムのHD化にさらに力を入れていきたいと考えています。まず今年度のHD比率の目標は全日の70%、10月期の連続ドラマの2枠のうち、1本をHD化し、さらに来年の1月のドラマもHD化を考えております。これに伴い、ドラマを制作している生田スタジオのHD化のための改修工事を1年間前倒しして実施し、今年度中には完成の予定です。また、麹町のスタジオのHD化の改修工事も完成予定を2008年と考えていましたが、受像器の普及が進んでいることから、完成予定を2年程前倒し、2006年度中には完了させるスケジュールで進め

ています。

これにより、2007年にはHD比率を、ゴールデン、プライムで80%、全日では90%ぐらいまで達成できると考えています。

6．総務省が民放連に対し「政治的公平」の確保の検討を要請してきた問題について

記者：先日総務省から「TVタックル」と山形テレビの自民党の広報番組について、政治的公平を確保するように、民放連に対して要請がありました。氏家会長の見解をお聞かせください。

氏家会長：政治的公平は必要であると思います。しかし、それを政府が言うことによって、いわゆる言論介入となり、言論の自由をある程度阻害する要因になることを恐れています。

若い世代の皆さんは、言論の自由は当たり前と思っているかもしれませんが、実際は与えられたものです。かつては進駐軍の検閲という一種の政府による言論弾圧もあり、民主主義の基礎に関わると厳しく律してきた。現在のマスコミの経営者は、言論の自由がなくなるということ、言論の弾圧が行われるということ、言論の規制が行われるということが、どれだけ国民にとって不幸なことであるかということを若い頃実感して育ってきた人が多いので、政治的公平については十分に理解している。こうした問題は放送事業者の良識で解決すべきで、政府が、神経質に口出しをするのはいかなものかと感じています。

ただ、藤井孝男さんのケースは、政治的公平の問題ではないのではないかと思います。テレビ局内部での自浄作用によって、こうした問題が起きないようにすることが正しい解決方法ではないかと思っています。

記者：参院選の報道はどのように行いますか。

島田報道局長：開票特別番組は、7月11日投票日が終わる20時の直前19時58分から、翌日の午前2時までの生放送を考えています。2部構成で、大勢は判明するであろうと予想される23時30分から24時までの間で1部は終了、「スポーツうるぐす」をはさみ、今後の政局運営等に関して午前2時まで放送する予定です。

当選や当選確実と報道する際には慎重を期して実行させていただきます。また出口調査に関しては、今回は日本テレビ及びNNN系列単独で実施します。サ

ンプルを集める場所が大体565箇所、サンプル数が18万、19時58分までにまとめて、投票終了後直ちに各党の議席数を予測します。

7. 夏のイベント、日テレジャンボリーについて

記者：夏のイベント、日テレジャンボリーについてご説明してください。

萩原副社長：7月17日から8月31日まで、日テレジャンボリーと銘打ち、この汐留の社屋周辺でイベントを展開します。日テレジャンボリー委員会と、同実行委員会を発足させました。これは私どもとしては24時間テレビと同じ取り組みです。氏家会長を委員長として局長や執行役員以上のメンバーによる委員会です。今回、日テレジャンボリー委員会をつくったのも、番組は24時間テレビ、イベントは日テレジャンボリーというつもりで発足させました。日テレジャンボリー実行委員会の委員長は土屋敏男が委員長です。ご承知のT部長です。今や局次長ですからT局次長ですけれども、彼の発想をフルに発揮したイベント大会ということで、「見て食べて遊んで」というコンセプトです。

「見て」は、展示、番組収録、「食べて」はフードコーナーやカフェ、「遊んで」は野球ゲームや、24時間テレビのマラソンと同時スタートで、ゴールまで子どもたちがずっと張りつないでいくというルームランナー型のゲームを展開します。そのほか、例えば「伊東家の食卓」の裏ワザを体験してみるとか、「ザ！鉄腕！DASH!!」の水田の田植えをやってみるとか、そういったものも含めてすべて番組連動ということです。イベントも番組連動、そのイベントを今度は番組の中で取り上げるという、いわば番組とイベントの相乗効果を狙った大イベントで、お台場の冒険王と対抗しようという日本テレビのイベントです。毎年、24時間テレビと日テレジャンボリーと二本柱でやっていくつもりです。24時間テレビだけでなく、このイベントでもお台場冒険王をしのいでいきたいという意欲で、T局次長が今一生懸命考えています。来て楽しんでいただける「Qレート」で勝負して行きたいと思います。ご期待ください。

その他

記者：巨人戦の視聴率ですが、データ的に見るとちょっと去年より下がってい

ますが、いかがでしょうか。

氏家会長：去年よりはまだ下がっていますが、一昨年よりは少し上がりかかってきています。ただ札幌で3連敗したのが痛かった。

記者：かつて前半戦（4月～6月）で1ケタということは、ほとんどなかったと思うのですが、先週（6月第3週）は3回も出ています。何か変わってきたなというお考えはありますか。

氏家会長：全体として変わってきていることは事実なのですが、昔は13対3というような試合はなかった。負けても10点以内でとどまっていた、ジャイアンツも6、7点はとっていた。今は、ジャイアンツだけでなく各球団同じように10点以上開いてしまうゲームも多く、バスケットボールの開きのほうが少ないという感じで…。そこが問題なのでしょうね。

記者：かつては20%を超えるのが当たり前みたいな時代もありましたが、最近はどうですか。視聴率表を見て、何パーセントだとほっとしますか。

氏家会長：プライム、ゴールデンなどに関して、昔に比べて2～3%平均水準が落ちているなという感じがしています。そういうところから比較してみると、20%でなくても15%程度とっていれば、これはプライムでは合格だなということが言えるだろうと思っています。

記者：13～14%ぐらいとってくればいいなということですか。

氏家会長：それはやっぱり15%以上とってもらわないとね。

記者：以前、パリーグで確か20何対1とかという試合ありました。そのとき、監督がお客さんに向かってごめんなさいと謝ったそうですが、10点以上差がついたら、これは試合をぶち壊したということなので、負けたほうの監督に謝らせるというのはどうでしょうか。

氏家会長：アメリカでは、そういうときには謝るみたいですね。そういう球団の風土はあってもいいかもしれません。でも球場のお客さんだけでなく、視聴者にも謝ってもらいたいですね。（了）